

【寄稿】

カラコルム遺跡の陶磁器調査

初秋のモンゴルへ考古学チーム

世界が注目した昨年の調査に続き
地道な作業9日間 現地の研究者育成も行う

モンゴル・カラコルム遺跡出土陶磁器(とうじき)の第2次調査が8月、ウランバートルで行われた。カラコルム遺跡出土陶磁器調査団(団長・亀井明德文学部教授)とモンゴル科学アカデミー考古学研究所との共同研究である同調査は昨年に続くもので、今回の様子を、亀井団長から寄稿していただいた。



▲陶磁器の選別作業

カラコルム遺跡の陶磁器調査

文学部教授・亀井明德

8月の初めのウランバートルは初秋である。天高くぬけるような青さと、強い陽ざしではあるが、肌にふれる風はさわやかである。7月中旬におこなわれたナーダムの祭り(モンゴル民族の祭典)がおわると人々の高揚感がきえて、秋の気配を感じるようである。

私たち専修大学アジア考古学モンゴル調査チームとして院生の新島奈津子さん(文学研究科博士後期課程)ら5人は、今年も8月6日から9日間にわたって、モンゴル科学アカデミー考古学研究所で、カラコルム遺跡出土陶磁器の調査をおこなった。



▲調査協定書調印(中央がツベンドルジ所長、右は亀井教授)

カラコルムは、モンゴル建国のチンギス・ハーンの息子であるオゴデイ・ハーンによって1235年に造られた首都である。その後、都は大都(現在の北京)に移るのでここは旧都となり、モンゴルの人々にとって共通した想いをもつ古都として心に刻まれている。



▲モンゴル科学アカデミー正面

カラコルムは、ウランバートルから西へ車で7時間、草原のなかに石碑などによって、わずかに往時の面影をのこすのみである。人類史上最強とおもわれるモンゴル軍のつわものの姿は、低い夏草のなかに、幻のごとく消え去っている。1380年代に強力な明軍によって、壊滅的な攻撃をうけて、元はこの地で滅ぶ。



▲エフカさん(左端)へ実測指導

このカラコルムの遺跡に最初にメスをいれたのは、1948—49年の、ロシア科学アカデミーの考古学研究所による発掘調査である。草原のなかに、周囲を土壁によって1.4キロ×1.1キロで囲み、その内に宮殿・寺院などともに道路が交差する都市が造られ、さまざまな職業の庶民がくらす街であった。ロシア隊の調査によって、多くの発見品があった。

出土品のなかで中心となるのは、中国製の陶磁器であり、すでに報告書が刊行されているが、不完全である。そこで昨年、モンゴル国立歴史博物館に所蔵されている陶磁器のすべてについて、実測・写真撮影・調書作成をおこない、今年の7月に『カラコルム遺跡出土陶磁器の研究I—専修大学アジア考古学研究報告書2』を発行した。ロシア科学アカデミーによる報告書刊行以来、半世紀ぶりに、出土遺物の中心を占めている陶磁器について詳細な報告書が実現した。詳しい英文も添付され、世界のモンゴル研究者の注目をあびつつある。

昨年の調査中に、国立考古学研究所にも、破片があるという情報をえて、今回の第2次調査の実現にいたった。研究所との間に、調査協定を結び、調査とともに、モンゴルに陶磁器研究者を育成してほしいという1項目がくわえられた。毎日、朝9時から夕方6時まで、エフカさんという女性研究者の部屋を使わせていただき、実測・写真撮影・調書作成という、下ばかりをむいている地道な作業をつづけた。エフカさんは、非常に熱心であり、はじめて陶磁器の実測をすることだが、私どもが帰国するまでに、かなり腕をあげた。

世界の考古学者のなかで、研究者自身が実測図を作成しているのは、日本だけである。図面を正確に作図することによって、モノを深く観察することが可能となる。わが国でも最近では、他人の図や写真のコピーですませる傾向があり、これではモノの本質がみえてこない。エフカさんは、日本人的な緻密さと忍耐力をもち合わせているようで、モンゴル人の手による陶磁器研究が推進できれば、私たちのモンゴルでの仕事のひとつの目的がかなうのである。

陶磁器を観察していると、いろいろと興味深い事実が発見されてくるが、専門的すぎるので、それは割愛したい。遅くとも来年度には、『カラコルム遺跡出土陶磁器の研究II—専修大学アジア考古学研究報告書3』を、日本語・モンゴル語・英語で発行する計画である。

女性に支えられて

今回、考古学研究所との間で、煩雑な交渉を、私たちが行く前から引き受けていただいたのは、デルゲルマーさんである。彼女は、専修大学大学院文学研究科修士課程で宇都梨子教授の指導を受けた。現在は東京大学の大学院生である。



デルゲルマーさん

研究所の担当者とは何度も交渉をかさね、最初の日に私がツベンドルジ所長と陶磁器調査協定書に調印できたのは、彼女のお膳立てのおかげである。すでに4歳のたくましい男の子をもつ母親であり、ストリート・チルドレンとよばれている都市部の貧困な児童問題に実践的に取り組んでいる。

もうひとり、現地で通訳として私たちを献身的にサポートしてくれたのは、エヌビスさんという若い女性である。彼女は、モンゴル国立大学の大学院に進もうとしている方であり、大阪外国語大学に1年間留学したということであるが、じつに流暢(りゅうちょう)で、美しい日本語を話す。この文の冒頭に「もう初秋の感じ」といったのは、じつは彼女の言葉である。



エヌビスさん

彼女もまたモンゴルの負の部分を見つめているようで、身体障害者への公的援助や、最近、外資系企業により、金・錫・銅などの鉱山開発がおこなわれ、それにとまって公害が発生している。「ミナマタ」と同様の水銀汚染が発生する恐れが生じているようである。彼女は、「ミナマタ」の日本のテレビ番組をモンゴル語に訳し、日本の悲惨な状況を教訓にして、モンゴル人に啓発活動をしている。

私たちの仕事が終わった夕刻、片道2円のバスのなかで、彼女は、これからデルゲルマーさんとおなじように、貧民地区に行って、ボランティア活動をしますと言って別れた。こうした日本をよく理解し、モンゴル社会がかかえている負の部分に焦点をあてている女性にめぐり会えたのは、大変うれしかった。私たちの陶磁器調査と同じか、あるいはそれ以上に価値のある話を聞くことができたのかもしれない。

ウランバートルは、残暑から9月の初めには、初雪が舞い降りる。

私たちの調査は、日本学術振興会の科学研究費によるものであり、煩雑な事務処理をいつもしていただいている専修大学の所管事務の方々に謝意を表したい。

(かめい・めいとく) 文学 博士。研究テーマは中国陶磁史、アジア考古学。

≪専修人の新しい本≫

出会いと心理臨床

医療心理学 実践の手引き

乾 吉佑 著



約40年間にわたり臨床心理士として、大学総合病院、大学学生相談室、企業の健康支援センターといった医療心理学の現場で幅広い臨床経験を積んだ著者の知見が盛り込まれた論集である。長年の経験から、クライアントとその家族へのより良い支援のためには、医療現場に「力動的心理療法」の視点を導入することが有用であると説いている。

リエゾン・コンサルテーションの実際や、医療スタッフへのコンサルテーションなどの実際をまとめたものは数少ない。本書は、心理専門家だけでなく、医師、看護師、理学療法士、作業療法士など医療現場にかかわるすべての人々への手引きとなろう(金剛出版・本体3000円＋税)。

著者(いぬい・よしすけ)＝文学部教授。臨床心理士。主な担当は臨床心理学。

シリーズ 災害と社会(1)

災害社会学入門

大矢根 淳 編著



この10年、世紀末ブーム、サリン事件、2000年問題などを経て危機管理論は隆盛を誇った。同時期、防災工学分野からは「地学的平穏の時代の終焉」との警告が発せられていた。伊勢湾台風(1959年)以来、わが国は死者千人を越す大災害に見舞われておらず、その間に達成した高度経済成長・日本の姿は、大災害に未経験の仮の繁栄の姿なのではないかと指摘された。そして、警告通りに雲仙・普賢岳噴火災害、奥尻島地震津波、阪神・淡路大震災…、と大災害が続発する。

米国戦略爆撃調査(その成果としての東京大空襲、ヒロシマ・ナガサキ)を源とする災害社会学が、先行するわが国独自の関連学問を包摂しながらいかに確立・展開してきたのか。的確に俯瞰するわが国最初の災害社会学のテキストである(弘文堂・本体2500円＋税)。

編著者(おおやね・じゅん)＝文学部教授。担当は環境社会学・社会調査実習。

シリーズ 災害と社会(2)

復興コミュニティ入門

大矢根 淳 編著



災害は社会の脆弱な層に顕在化する。木造老朽家屋が倒壊してそこに住む高齢者が多数犠牲となった阪神・淡路大震災は、高齢化社会の練習問題とも言われた。被災現場を丹念に調べ、そこに実践的に関わり続ける社会学の営みに関して、本巻は特に「復興コミュニティ」という領域に特化して論じる。あの震災を見聞した誰もが、二度と同じ惨禍が繰り返されないようにと願い、堅牢な都市の復興を望み、復興都市計画事業が実現した。そして結果的にジェントリフィケーション(居住階層の入れ替え・高齢者世帯の追い出し)の嵐が吹き荒れた。

古今内外、さまざまな被災現場におけるコミュニティの復興に関して、豊富な事例・斬新な分析視点で災害を可視化するわが国最初の試み(弘文堂・本体2800円＋税)。

